

## 滋賀県文化審議会次世代育成部会第8回会議 議事録概要

- 1 日 時 平成26年10月7日(火) 13:00~15:00
- 2 場 所 大津合同庁舎7A会議室
- 3 出席者 委員：辻部会長、木下委員、杉江委員、中島委員、宮本委員  
事務局：総合政策部次長、総合政策部管理監ほか
- 4 議事録 以下のとおり

---

### ■次長挨拶

### ■議 題

#### (1) 議題1 次世代育成施策の実施状況について

##### ○事務局

(資料1について説明)

##### ○委員

- ・「学校にアートがやってきた」の芸術家は滋賀県在住の方を選んでいるのか。どのように芸術家を選定しているのか。

##### ○事務局

- ・事業が終了した後も、学校や地域とのつながりを継続していただくことと、地域の方に活動を知っていただくということも目的としているので、実施校の近くで活動している芸術家を選んでいる。
- ・芸術家の選定方法については、モデル事業ということもあり公募という形はとっていない。紹介の形が多い。

##### ○委員

- ・「びわ湖ホール音楽会へ出かけよう」について、平成26年度の実績数が上がっているようだが。

##### ○事務局

- ・対象となる学校は全体で247校。今年度は89校なので4割弱の参加。
- ・交通費の補助が増えたので、長浜など遠くの学校からの参加も増えてきている。大津や草津からの参加が多くなっている。まだ来ていただけていない学校にできるだけ来ていただきたいと考えている。
- ・県には体験学習として「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」がある。これらは、すべての児童が体験するが、「ホールの子」は一部の児童しか来てないというのが課題。特にびわ湖ホールから遠いとより機会が少なくなるため、もう少しバランスよく増やしていければと考えている。

#### ○委員

- ・事業の成果がわかりづらい。どういう目的で事業を実施したのかということと、達成できた点、課題となっている点を資料として挙げてほしい。特に内容面について、子供たちがどう対峙していたのかということを知りたい。
- ・どの事業も問題点をどうやって改善していったのかが見えない。
- ・ホールの子事業については来ていただくためにプログラムをより充実させていくことが大事だと思うが、北部に出かけていくというプログラムが選択肢のひとつとしてあってもいいと思う。
- ・ただ一回来ればいいということではない。次に繋がるように県内のプログラム、地域のプログラムを合わせて連動させていくような仕掛けづくりができると、すごいプログラムになるのではないか。2020年を目指して設計していくといい。
- ・「学校にアートがやってきた」事業については成果と評価が分からない。展開の仕方によってはものすごく広がると思うが、見方によってはやりっぱなしになっていないかというところもあると思う。
- ・費用対効果を知りたい。見える化をしないといけない。

#### ○事務局

- ・資料が行き届いていなかった点については申し訳ない。
- ・ホールの子については事前学習をしてもらっているが、その後のフォローまでできていない点もあるので、今後もそのあたりを示して評価したい。
- ・学校にアートがやってきた事業については手探りでやっているところもある。もう少し整理する必要があると思っている。
- ・文化の事業は非常に出口が難しい。びわ湖ホールに行って本物の芸術に触れるということで子供たちにどれだけの変化が現れるかというのは非常に難しい。若手芸術家の育成にしても成果が見えにくい。しかし、成果が見えなければやめる必要もあるので、そこは十分議論していただけるようにしたい。

#### ○部会長

- ・どの部署でどの事業をやっているか仕分ができている簡単な図があればわかりやすい。

#### ○委員

- ・「ホールの子」事業は、ここまで規模を拡大してきているので「うみのこ」のようになるよう続けていただきたい。
- ・続けていくためには学校の先生とのタイアップをしていかなければならない。そのあとの学校での学習に繋がるように県の学校教育課とも連携をとってモデルになるような年間カリキュラムを作るなど、もう少しつつこんでやっていくといい。
- ・「学校にアートがやってきた」事業についてはそれぞれの学校の図画工作のカリキュラムにどんな風に繋がっていくのかということを考えてほしい。今年は普段と違うことをやりますということではなく、子供に力をつけるために、この活動がどういう風に繋がるかが大事。

○委員

- ・滋賀次世代文化芸術センターのような中間支援の役割の方が学校とアーティストの意見をまとめてくれるとやりやすい。音楽を実際に聴くと先生は認めてくれるが、学校に入るのは本当に大変。アーティストの経験や人柄はすごく大事なので、そこを見極めてコーディネートできる方をしっかり決めてやっていくべき。

○委員

- ・「文化芸術の力を教育に」に関しては成果がでてきている。鳥肌が立つような状況が起こっている。子どもたちが変わって、学校に戻ってきている。これは全国的に非常に貴重な例だと思うので、要因分析から含めて、まずは企画そのものをモデルとして完成形にしていくことが大事。
- ・本当は美術館の中に芸術センターが欲しい。学校でやるプログラムをそこで実験的にやるというような仕組みづくりをしたり、色んなコミュニティーの場にしたりするのもいい。お金がないので実現できないが、そういう場が欲しいとは思う。

○部会長

- ・芸術センターを浜大津あたりにつくって、連携して繋がることのできるという。美術館や次世代センターとも連携しやすく、行政とも連絡がとりやすい。アール・ブリュットも含め、大きな地図を描けば見えてくるものもあるかもしれない。

(2) 議題2 次世代育成部会の審議内容と施策への反映について

○事務局

(資料1について説明)

○委員

- ・県政モニター対象で「若手芸術家の活躍の場が確保されていると感じているかどうか」という問いがあるが、実際のところは芸術家の方に聞かないとわからないと思う。

○部会長

- ・パフォーミングアーツについてはびわ湖ホールを中心に若手芸術家の活躍の場がある程度確保されていると感じられるかもしれないが、美術の方はかなり厳しい。はっきりいうと、滋賀県は役割分担してもいいと思う。近くに京都があって、あそこがやっているからといって同じようにやるではなくて、うちはこういう形でやるというのがあってもいいと個人的には思っている。

○委員

- ・重点施策3「子どもたちが本物の芸術に触れる機会の充実」については、このまましっかりやってほしい。
- ・重点施策4「若手芸術家の育成・支援」については中途半端。目標設定やどういう風に県でやっていくかについてももう少し議論が必要。

- ・重点施策5「文化活動を支える人材の育成・支援」については、「地域文化コーディネーター&文化ボランティア養成事業」があるが、テーマが限定的で伝統文化に絞られすぎている。伝統文化で活躍する場があればよいが、汎用的にボランティア育成をするということであれば、もっと広く募集をし、県内の施設のボランティア推進ともタイアップしながら、その施設にも入ってもらって講座をやるといいのでは。
- ・滋賀次世代文化芸術センターはボランティアが欲しいので、そこと連携しながらやっていくことも大事。
- ・滋賀次世代文化芸術センターで色んな活動をした上で、センターからコーディネーターとして認められた人がコーディネーターとして仕事をするようにしてはどうか。プログラムの質の保証はコーディネーターがしっかりやらないといけない。コーディネーターの目を養成しなくてはならないので、数年かけてたたきあげていかなければいけないと思う。

#### ○委員

- ・伝統文化の場合、すでに村の中にコーディネーターがおり、その人たちがコーディネートしている。「おこない」という行事を湖北や甲賀でやられているが、直会の食事が豪華になりすぎたら、それが続けていけないので元に戻すというように、自ら修正を加えながら続けている。農村の知恵として皆さんが持っておられる部分をいかに引き出すかというところで、滋賀県ならではの独特のやり方が見えてくると思う。
- ・コーディネーターの育成がはたして適切なのか。やっていることに誇りをもってもらえるような仕組みづくりも必要。

#### ○委員

- ・長栄座はどこまで南のほうに影響があるのか疑問がある。試みが北のほうだけでとどまっているような気がする。
- ・関西ならではの伝統芸能、古典芸能があると思うので、もう少し視野を広げて何ができるか考えられるのではないか。

#### ○委員

- ・「文化芸術の力を教育に」推進モデル事業にアーティストとして関わり、子どもたちの変化を実際に体験した。もっと事業を拡大して予算をつけたら、すごくいい事業になると思う。

#### ○委員

- ・「文化芸術の力を教育に」推進モデル事業はすごくいい取組だと思う。学力の問題もあり、芸術がどんどん縮小されている。子どもたちが抱える問題に対して、文化芸術が力を持っているということは、ある程度授業を進めていかないと示しにくい。ぜひとも予算を増やしてほしい。

○委員

- ・今の学校現場は学力中心となってきたが、文化を担うセクションとしてそれは違うと言うことが大事。
- ・若手芸術家に関して、まずはきちんと情報集約すべき。データを整理した上で活動の場を作っていく必要があるのか、他に支援が必要なのかを検討していくべき。

○部会長

- ・ビジュアルアートに関して言うと、住んでいるのは滋賀だが、活動しているのは全部京都である。それをきっちり情報として掴まえることが大事。滋賀県にかなりの芸術家がいるが、発表の場もマーケットもない。
- ・京都もマーケットはないが、発表の発信としての場は十分機能を果たしている。マーケティングは東京に行く。この状況をきっちり掴まえて滋賀県の中で次世代の人たちにとってどういう施策をやっていくか考えて行くことが大事。
- ・全部カバーしていくことは無理なので、いわゆる滋賀スタイルみたいなことができればいい。

○委員

- ・今はアートでまちおこしが行われている。住んでいるのに活躍の場がないということではなく、地域の中に役割をつくるような支援の在り方も滋賀県のモデルとして考えてもいいかと思う。県政だけでなく地域自治体との連携が必要になってくる。

○部会長

- ・京都では芸術白夜という音楽も美術も舞踏も建築も全部含むジャンルを超えた芸術イベントが実施された。これには観光客が入りこんでくる。
- ・例えば農業を含んで伝統も含んでやっていることは滋賀スタイルではないかと思う。

○委員

- ・自分たちがやっている祭りにはどんな意味があるのかと聞かれることが多い。もともとの意味をみんなが失いかけているから自信がなくなり、熱心なひとがいなくなるとパッと辞めてしまうのが最近の特徴。
- ・滋賀は文化がたくさんあり、歴史がある。他の地域と全然違う。

(以上)